《論　　文》

高等商業学校の成立に関する覚書

渡　辺　邦　博

1.　はじめに
2.　「大学令」以降
3.　高等商業学校関係略年表

キーワード：専門学校、高等商業学校、帝国大学

1.　はじめに

「いま、明治から数えれば第三の大きな改革の渦中にある、わが国の大学と高等教育システムが直面している様々な問題は、たどって行けばその多くのルーツを、……明治から大正初年にかけての「大学誕生」の時代に求めることができる。官公私立の多様な高等教育機関が織り成す「大学誕生」の物語は、その意味できわめて強い現代性を持っている。」[1] と言われる。

さらに、本稿の問題意識に関連付けて言えば、帝国大学と並んで産業実業界に多数の人材を輩出して来た「旧制専門学校」[2] は、高等教育の

1 天野郁夫 [2009]、419 ページ。
2 第二次世界大戦後の「戦後改革」により、大正 7 年の旧大学令による高等教育機関の編成替えがあり、新制大学が発足したが、以下では、そのいわゆる「新制大学」発足以前に高等教育機関としての「昇格」を果たした諸学校群を「旧制」と分類しておく。

もう一つの一翼を担ってきた教育機関であったが、その歴史を追跡することは、社会から需要される人材を担ってきたその意義を捉え返すことであり、現在の高等教育の「マス化」の状態において、社会に必要とされる高等教育の有り様、または人材養成のあるべき姿を探る積極的な意味を持つと言えよう。[3]

また、別の著書において天野は、戦前の高等教育は簡単だった。「大きく分ければ大学・高等学校・専門学校という、３つのタイプの学校から成り立っていたが、戦後これらの学校は、すべて「大学」という名称のただひとつのタイプの高等教育機関に統一されてしまった」。[4] と述べている。

加えて、「高等学校は、その名称を新しく設けられた３年制の中等学校＝「新制高等学校」にゆずり、新しい大学の「教養部」となり、「旧制高校」との通称で知られる。それは帝国大学を目指す学生の予備教育機関であったが、その卒業生であったことは誇らしげに語られる。専門学校も戦後ほとんどが新しい大学となったが。昭和 20 年段階で学校数にして 309 校、旧制高等学校の 33 校の 10 倍であった。卒業生の数は高校を経て大学に進んだ者よりはるかに多かった。にもかかわらず、その歴史が語られるのはなんと少ないか。中等学校の卒業生を直接入れる、したがって大学よりも年限が３年短い専門学校は、一段格が低い学校とみなされてきた。」[5] とも述べている。[6]

---

3 天野 [2009] によって、昭和 16 年段階の高等教育、大学と専門学校を数えてれば、大学 46、専門学校 220、（各々の卒業者数 15000 人、と３万 8000 人）を比べると、専門学校の占める割合が大きく、大学が主で専門学校が従のヨーロッパとも、すべての高等教育機関が大学と呼ばれていたアメリカとも違って、日本は専門学校中心の拡大の結果としての高等教育システムであったと言える。大正７年公布の「大学令」は、明治 19 年公布の「帝国大学」の規定を下敷きに作成され、大学を指向する専門学校に対しては帝国大学モデルへの上昇を求めるものであった。天野、前掲書、364 － 368 ページ。

4 天野郁夫 [1978]、「プロローグ」７ページ。

5 天野郁夫 [1978]、「プロローグ」７ － ８ページ。

旧制高校から帝国大学へと進むルート、中学から専門学校へと進むコース、戦後の単線的教育体制と比較して、複線型と称されるそれ[7]の功罪を検討することにより、戦後 70 年以上を経て、大きく変容を遂げた高等教育体系を検討し、現代における高等専門教育の行方を探る、特に経済・商学領域のそれを再検討する、これが本研究の課題である。

2.「大学令」以降

大づかみに言って、大正 7 年に公布された「大学令」は、それまで「帝国大学」の基準とされてきた 1886 年（明治 19 年）公布の「帝国大学令」

---

6 台湾総督府『台灣年鑑』昭和十七年版上には、p.218 に「全國大學、高等、専門學校一覧」、1942 年段階での日本の高等教育機間が掲載されている。今から見ると隔世の感で、まず帝國大學及官立大學が東京から大阪までの 6 校、東京と神戸の商科・商業大學、新潟・岡山・千葉・金澤・長崎・熊本の醫科大學、神宮皇學館、東京文理・廣島文理科大學、東京工業大学、これが帝國及官立大學、その次に公立大學が二つ、京都府立醫科大學・大阪市立商科大學、後は私立大學が、慶応と早稲田を先頭に、関西学院・藤原工業大學＜現在の慶應義塾大学＞までが 26 校掲載されている。

7 少し横道に逸れるが、アダム・スミス研究の戦後トリオと称される、水田洋 <1919->、小林昇 <1916-2010>、内田義彦 <1913-1989>（敬称略）。内田は、1913 年愛知県に生まれ、旧制甲南高校から東京帝国大学経済学部、大学院を退学後、東亜研究所所員、東京帝国大学嘱託などを経て、1947 年以来専修大学経済学部などで経済学史を担当した。1916 年京都に生まれ、旧制武蔵高校文科から東京帝国大学経済学部を卒業、1939 年東京海上火災入社、1940 年福島高商講師、教授の後 1944 年 7 月応召、11 月米潜水艦の攻撃で日永丸沈没、ベトナムで転戦後、1946 年 4 月復職、1949 年 6 月福島大学教授、1955 年立教大学教授、日本学士院賞、アダム・スミス賞などを受賞、1992 年日本学士院会員となり、アダム・スミスの会会長を務めた小林。1919 年東京港区に生まれ、府立一中の校風を嫌って、同 4 年の時東京商科大学予科に進学、1941 年繰り上げ卒業後、翌年東亜研究所入所、軍属として南方に赴任、スラウェシ島での捕虜生活を経て 1946 年母校の特別研究生、1949 年に赴任した名古屋大学法経学部（のち経済学部）でアダム・スミス研究を行った水田。この人たちの経歴を想起する時、改めて天野の言う 2 つのコースとは何だったのかを考えてしまうのである。小林昇 [2002]、水田洋 [1978] などを参考にした。

水田の 1 年後大正半ばに生まれたある経済学者の回想に「二重の意味での傍系」との表現を耳にしたことがある。それは、明治生まれの帝国大学出身の経済学史研究者を先達として研究を進めつつ、中学校から旧制高校を経て帝国大学に進んだ同輩の研究者、あるいは中学校から大学予科を経て商科大学に進んだ同僚の研究者が正系の研究者とすると、商業学校から高等商業学校を経て商科大学に進んだ自らの歩みを諧謔的に表現したのではないかと推察している。

の立場＝大学とは総合的な、帝国大学以外にないとの法令を修正し、帝国大学と並んで事実上高等教育を担ってきたが、「帝国大学令」の後に別途定められた「専門学校令」1903 年（明治 36 年）下にあった専門学校をも法律上の大学と称するのを認める事態を作り出した。[8]

各種の専門学校の中で、商業・経済学に関しては、その最初の高等商業学校を筆頭にして、官公立あるいは私立の諸学校が創立されたが、東京高等商業学校がその後の高商のモデルとなった。[9]

ここで、数多くの高等商業学校（そのうち３校は、上記大正７年の「大学令」によって商科大学、あるいは商業大学に昇格したが、）を詳細に取り扱う余裕はない。

また、経済商業分野における教育研究を担ったのは、帝国大学、高等商業学校であったとするのが通例であるが、とりわけ最後の私立大学系において展開された諸学校については、本稿で考察対象とすることができなかった。それはその意義を等閑に付した訳ではなく、むしろ、最近 100 年間の歴史を有する各機関においてそれを検証する成果が出されており、他方で各大学のアイデンティティーの確立の要請から、次第に研

---

8 この時期、高等教育機関拡充政策がとられ、大正８年以降の６年間で官立高等学校 10 校、官立高等工業学校６校、官立高等農業学校４校、官立高等商業学校７校、外国語学校１校、薬事専門学校１校、帝国大学４学部を設置する計画があったが、大学５校の昇格、商科大学１校の昇格、と計画はほぼ計画通り実現された。

9 明治６年、森有礼提案になり、東京会議所の管理に始まる商法講習所が、最初の高等商業学校の起源とされる。実業界からは渋沢栄一の支援も得て、矢野二郎が当面所長を務めた。東京府、農商務省、文部省との管理者問題、併せて財政問題を克服して、1885 年（明治 18 年）に、同校は文部省所管の高等商業学校となった。この矢野二郎は、アメリカのビジネススクールをモデルに英語を正則とした短期促成型実務教育を目指したが、府会からの批判を受けて国語を基礎にした英語科と実践科に修正したり、修業年限を５年として、調整を図ったが状況を脱出できなかった。「一橋に流れる二つの潮流」専門教育の充実を求める「書生派」と、実用的教育つまり、簿記、英語、商用作文などを中心とする「商人風」「前垂風」との対立は学校に何かあるたびに画然と現れた。このため渋沢からも評価の高い矢野が遂に 1893 年（明治 26 年）、職を辞すことになった。

この問題は、その後本校に続いて族出した数多の商業学校にも通底することであって、実業学校の宿命とも言えるものとなった。東京高商は、この点でも後続する高商のモデルである。

究の裾野が拡大しているのだが、そうした個別研究をフォローできていないことによる。

さしあたり、官公立の高等商業学校の流れを踏まえておこう。

大正 9（1920）年、大学令公布を受け最初の単科大学として昇格を遂げた東京商科大学（勅令第 71 号）[10]、上記大学令の改正によって設置主体が「道府県」であったものが、「道府県及市」と改正されたのを受け、昭和 3 年大阪市立高商からの商科大学に昇格が行われ（勅令第 7 号）、明治 35 年に第 2 番目の官立高等商業学校として神戸に設置された高商は、昭和 4 年第二番目の官立神戸商業大学に昇格（勅令第 98 号）がなされて、3 商大が出現した。

戦前には大学としての昇格はなかったけれども、以下の官公立高等商業学校が設置された。1902 年に山口高等商業学校は高等学校から（勅令第 40 号）転換、1905 年（明治 37 年）勅令第 96 号により設置された長崎高等商業学校、小樽高等商業学校（勅令第 66 号）1910 年、名古屋高等商業学校（勅令第 551 号）1920 年、大正 8（1919）年・台湾総督府令第 62 号により設置された台北高等商業学校、福島高等商業学校（勅令第 456 号）1921 年、大分高等商業学校（勅令第 456 号）1921 年、彦根高等商業学校（勅令第 441 号）1922 年、和歌山高等商業学校（勅令第 441 号）1922 年、京城高等商業学校（朝鮮総督府令第 53 号）1922 年、横浜高等商業学校（勅令第 501 号）1923 年、高松高等商業学校（勅令第 501 号）1923 年、高岡高等商業学校（勅令第 222 号）1924 年、大連高等商業学校（勅令 366 号）1941 年が設置されたのである。[11]

これら官公立高商群を検討するに際して、簡単ながら作成した年表を

10 戦前の学校関係においては、いわゆる勅令主義によって、高等教育機関の設置は「勅令」によって実施されている。

本稿の末尾に付しておいた。

3．高等商業学校関係略年表

＜凡例に代えて＞

漱石（夏目金之助，1867.1.5-1916.12.9）は、松山中学、熊本五高で教鞭をとり、明治28年からのロンドン留学による英文学の研究を経て、一高や東京帝国大学で教壇に立つ傍ら、「吾輩は猫である」などで文壇に登場、「坊ちゃん」「草枕」などを発表後、朝日新聞社に入社、「三四郎」をはじめとする三部作、「こころ」などで近代知識人の内面を描いた作家である。

他方で鴎外（森林太郎，1862.1.19.-1922.7.9）は、石見に生まれ、上京後津和野の先輩にあたる西周家に寄寓、東大卒業後陸軍に入り、明治27年以降衛生学を修めるためドイツ留学、帰国後「舞姫」などで文壇に登場、明治40年軍医総監・医務局長となり、明治34年「キタ・セクスアリス」「青年」「鴈」などの反自然主義的作品を発表、乃木将軍殉死に衝撃をうけ、「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」などの歴史小説に着手、退任を契機に「渋江抽斎」などの史伝に没頭した。

鴎外と漱石を出したのは、この明治を代表する２人の経歴に、今となっては些細な事項に属する「大学」を考察するに際して重要な、わが国近代化の過程で登場した学校制度の節目が存在するからである。

少し煩雑だが、この両者の経歴がいくつかの人名辞典でどう記述されているかを整理してみた。[12]

言うまでもなく、両者の文学・文学史上の位置づけはここでの関心で

---

11 上記の学校関係の勅令、関係法規は、ほとんどの機関が発行したいわゆる学校一覧も同様に、国立公文書館デジタルライブラリーに現物がアップロードされているか、比較的容易に閲覧が可能である。

はない。鴎外は、明治 10 年にわが国最初の「大学」として、東京開成学校と東京医学校を合併して成立した「東京大学・医学部」[13] を卒業、ただし明治 6 年の「学制二編追加」に言う「専門学校」、外国教師の教授する高尚なる学校の卒業生であったが、わずか 5 歳年下の漱石は、帝国大学成立以前の大学予備門を経て、明治 19 年 3 月の「帝国大学令」によって成立した帝国大学の卒業生であった、という事実である。もちろん、明治 19 年以降の眼で見ればその差は皆無であるかのように見え

---

12 まず、

①鴎外は、「明治 14（1881）年東京大学医学部を卒業後軍医となり、35 年間勤務した陸軍から大正 5（1916）年に引退したときは、現役の軍医として最高の陸軍軍医総監、陸軍省医務局長であった。同 6 年帝室博物館総長兼図書頭として宮内省に入り、61 歳で病死するまでその地位にあった。」（吉野俊彦稿）

漱石は、「＜在学を意味するのであろう＞一高、帝大英文科時代以後正岡子規と親しく俳句もよくした。明治 28（1895）年松山中学に赴任時の経験は「坊ちゃん」(1906) に活発な筆致で面白おかしく描かれている。熊本の五高で 4 年間（1896 − 1900）英語を教え、33 年秋文部省留学生として渡英、36 年 1 月帰国。前任者の小泉八雲をおしのける形で 4 月から東京帝大英文科で日本人として初めて講師となり、「文学論」「文学評論」、シェイクスピアなどを講じた。」（平川祐弘稿）朝日 [1994] ＜アンダーラインは、引用者による。以下同様。＞

次に、

②鴎外は「明治 5 年 11 歳の時父と共に上京し、西周の家に寄居し、進文學舎に獨逸語を學び、翌年大學醫學校豫科に入り、14 年同本科を卒業した。」

漱石は「明治 12 年一ッ橋中學に入學、のち二松學舎に轉じ、更に成立學舎に移り、17 年大學豫備門に入學、22 年 1 月正岡子規と知り合う。・・・翌年帝國大學文科大學英文學科入學、・・・26 年 7 月文科大學を卒業後、東京専門學校に講師として教鞭を執っていたが、28 年 4 月松山中學に赴任、・・・」平凡社 [1938]

③鴎外は、「1872 年（明治 5）に上京、81 年に東大医学部を卒業、軍医任官した。」

漱石は、「英文学への懐疑は、東京帝大英文学科に進み、卒業して後もつのる一方で、自分の生存理由を疑う人生的懐疑へ深まり、何ものかに追跡されている迫害妄想を抱くにいたった。」新潮 [1991]

④鴎外は、「親戚の西周の勧めで父と上京、東京大学医学部を空前絶後の満 19 歳で卒業して軍医となり、明治 17 年（1884）から 21 年まで足かけ 5 年ドイツに留学した。」

漱石は、明治 12 年（1879）、東京府立第一中學正則科に入学したが、14 年中学を中退して二松学舎に入り、漢学を学んだ。将来文学で立とうとした。しかし、心機一転して成立学舎で英語を勉強し、17 年 9 月、大学予備門予科入学。21 年本科第一部に進学。翌年正岡子規を知り、したしくなる。翌 23 年本科第一部をを卒業して、9 月帝国大学文科大学英文科入学。26 年 7 月、英文科第二回生として卒業。大学院に入学したが、10 月東京高等師範の教師となり、翌年一種の神経衰弱となって座禅などをした。28 年 4 月、愛媛県立松山中学の教員として赴任」した。臼井勝美・高村直助・鳥海　靖 [2001]

13 平凡社 [1938] では、大学医学校予科を経て、同本科卒とされている。

るが、行論の必要上で区別しておく。

近代化の途を急ぐ明治政府は、教育制度についても吸収した学術知識の消化・普及のための制度の整備も急いでいた。

1） その最初の一里塚が、明治5年の「学制」であろう。そこでは、日本全国を八学区に分け、小中大に分割した学校を普及させるという遠大な計画が、素描ではあるが盛り込まれていた。[14]

2） 自由主義的な「教育令」を排して登場した初代文部大臣森有礼は、学校種別ごとの、「帝国大学令」「小学校令」「中学校令」「師範学校令」との4つの個別政令を公布した。

帝国大学とは「国家の須要に応ずる学術技芸を教授し及びその蘊奥を考究する」のを目的とする機関　先進技術を身につけたエリートの養成の機関、それにはかなりの特権と学問的自由が付与された。明治19年、帝国大学強化のため、司法省法学校、工部大学校、農商務省東京林業学校、駒場農学校など文部省以外の他省が管轄する専門高等教育機関が、帝国大学に統合されたのである。[15]

さらに明治27年には、「高等学校令」を発して、高等学校を創設し、明治41年までに8校を開校した。

3） 日本最初の産業革命状況を背景に、一定水準の技能訓練を行う産業教育への需要も拡大したが、政府は、中等段階の教育整備のため、明治32（1899）年に、「実業学校令」と「高等女学校令」を公布する。中

---

14 翌明治6年 「学制二編追加」が出されて、学制にはないない学校が追加された。これが専門学校のルーツである。天野〔2009〕上巻、24ページ以下参照。その要諦は、外国教師が教授する高尚な学校で、そこで学術を得た者は、日本人に日本語で教授する、具体的には、法、医、理、諸芸、鉱山、工業、農業、商業、獣医、外国語学校を指す。さらに、ヨーロッパでは大学進学に、初等中等と順序を踏むが、専門学校進学にはそうした資格が必要でない、したがって、位の一段低い学校であると。

15 明治5年に「学制」は出されたものの、各省庁が自前の学校を持って高等教育を施していた、つまり鴎外は、未だ「グラン・ゼコール」時代にあった時に医学教育を修め、そのグラン・ゼコールが急きょ統合されて成立したわが国最初の「大学」東京大学医学部を卒業してそのキャリアの出発としたのである。

等教育が、中学校、実業学校、高等女学校の三本立てシステムとして確立したのである。

４） さらに社会の発展に伴い、帝国大学の水準まででではなくとも高度の専門的な教育を身につけた人材への需要が高まった。これに対して、明治 36（1903）年、「専門学校令」が公布される。専門学校は、中学・高等学校を経て帝国大学へと進学するルートとは異なり、中学・高等女学校卒業生を入学資格として、医学・薬学・法律・工業・商業などの専門教育をおこなう機関で、実業系は特に実業専門学校と呼ばれた。これによって、日本の高等教育は、官界を中心にトップエリートを送り込む「帝国大学」と、産業社会に実践的マンパワーを供給する「専門学校」の二重構造となった。長らく１校のみであった帝国大学も、京都（明治 30 年）、仙台（明治 40 年）、福岡（明治 43 年）に、相次いで帝国大学が創設されたのである。

５） 日露戦争と第一次大戦に刺激された日本資本主義は急速に発展した。これに伴い国民の教育需要も増大、教育制度改革と再編を求める声が高まった。政府は、大正 6（1917）年に内閣直属の「臨時教育会議」を設置、教育制度全体を見直し、翌大正7（1918）年、「大学令」を公布した。これによって、総合制の帝国大学だけでなく、単科大学や私立大学の設置が認められ、官立東京商科大学の認可、早稲田、慶応、明治、法政、同志社などの専門学校が大学に昇格する時代が訪れたのであった。[16]

以上のような教育諸制度を前提として、高等商業学校の考察に入る準備が整った。次の課題は、高等商業学校各論に進むことである。

以下の年表における、第３列目には、最初の高等商業学校で、大正の

16 以上の高等教育を中心とした、制度史については、学制百年史編集委員会の作成した、文部科学省のサイトにアップロードされた内容を参照した。

大学令によって東京商科大学に昇格した東京高等商業学校関連の事項を整理した。

第４列目には、明治 19 年の帝国大学令を起点とする、のちの東京帝国大学の、商業・経済に関連する事項を併記した。

第５列目には、上記２者に遅れて成立した商業経済関係の高等教育機関（官公立）に関わる事項を配置している。

参考文献一覧

朝日 [1994] 日本歴史人物辞典、1994.

天野郁夫 [1978]『旧制専門学校』日経新書 .

天野郁夫 [2009]『大学の誕生』上・下、中公新書 .

天野郁夫 [2016]『新制大学の誕生』上・下、名古屋大学出版会 .

臼井勝美・高村直助・鳥海　靖 [2001] 日本近現代人名辞典、吉川弘文館。

新潮 [1991] 日本人名辞典 .

平凡社 [1938] 日本人名大辞典、1938 年.

小林昇『山までの街』八朔社、2002 年 .

水田洋『ある精神の軌跡』東洋経済新報社、1978 年 .

三好信治 [2016]『日本の産業教育　歴史からの展望』名古屋大学出版会 .

吉川卓治 [2010]『公立大学の誕生　近代日本の大学と地域』名古屋大学出版会 .

高等商業学校関係略年表

年号	西暦	東京高等商業学校	帝国大学	その他の高商並びに商大
明治 7	1874		東京開成学校	
8	1875	商法講習所(東京府会議所・渋沢栄一会頭)		
9	1876	商法講習所（東京府）矢野二郎所長		
10	1877		東京大学(法理文医)	
11	1778		東京大学に学位授与権	神戸商業講習所
13	1880			私立大阪商法講習所
14	1881	東京府予算否決で、農商務省の経費補助となる。		府立大阪商業講習所
16	1883			
17	1884	東京商業学校を農商務省に移管、東京外語学校に付属高等商業学校を付設		
18	1885	農商務省東京商業学校と、文部省付属高等商業学校の合併		
19	1886		帝国大学（法・医・工・文・理の5学部）設置、「中学校令」高等中学の設置	
20	1887	高等商業学校に名称変更	学位令(博士・大博士の授与権は文部大臣、学士の称号化)３種の博士　①大学院修了後論文審査に合格、課程博士、②文部大臣に論文提出後、帝国大学が審査した博士、③文部大臣が推薦の上大学が審査した博士	
21	1888	最初の卒業生留学		
22	1889			市立大阪商業学校
23	1890			
25	1892			
26	1893	矢野二郎校長辞職、中学卒業者の試験入学制、専門以前の予備教育（高等普通教育）の開設=予科		
27	1894		高等学校令	
30	1897	研究科を専攻科に昇格、福田･佐野留学	東京・京都帝国大学	

高等商業学校関係略年表

31	1898		学位令の改正、推薦枠の拡大、博士会から文部大臣への推薦、「帝国大学総長」の推薦＜形式的に文部大臣が授与権を持つが。＞	
32	1899	予科1年、本科3年、専攻科2年=6年制、旧制高校3年+法科大学3年の帝国大学卒業に同じ。渋沢榮一同窓会で商業大學設立の必要性を説く。		
34	1901	専攻部、学士の称号取得、伯林宣言		市立大阪高等商業学校
35	1902	**東京高等商業学校**に改称	私立専門学校に大学名称を承認	神戸高等商業学校
36	1903			
38	1905			山口・長崎高等商業学校
40	1907	衆議院で商科大学設置建議案＜専攻部昇格か、法科大学分離か＞文相は法科大学内商学科案、生徒総退学決議・関や佐野辞表提出。文部省譲歩	東北帝国大学	
41	1908	申酉事件＜高商専攻部廃止計画に抗議＞	東京帝大・経済学科	
42	1909	申酉事件	東京帝大・商業学科	
43	1910		九州帝国大学	小樽高等商業学校
44	1911	佐野・関の復職	夏目漱石の博士会推薦博士号拒否事件	
大正 1	1912	奥野文相、帝大に高商編入論。高商の抵抗で撤回		
2	1913	高商専攻部廃止計画		
3	1914	高商出身の佐野校長に就任	京都帝国大学・政治経済学科	
4	1915			
7	1918	実業界出身の中橋文相、帝国大学以外の認可を内容とする「大学令」→「大学」への道	**大学令**（官公私立大学の設置認可・）北海道帝国大学	
8	1919		東京・京都帝国大学、経済学部	台北高等商業学校
9	1920	**東京商科大学(佐野善作学長)**、慶應義塾・早稲田大学設立	学位令の改正、各大学に学位授与権付与	名古屋高等商業学校

高等商業学校関係略年表

10	1921			福島高等商業学校
11	1922		東北帝国大学・法文学部	京城・彦根・和歌山高等商業学校
12	1923			横浜高等商業学校
13	1924		九州帝国大学・法文学部、京城帝国大学	高岡高等商業学校
14	1925			
昭和 1	1926			
2	1927			
3	1928		台北帝国大学	大阪商科大学、横浜市立高等商業学校
4	1929			神戸商業大学設置、神戸県立高等商業学校
5	1930			
6	1931		大阪帝国大学	
7	1932			
8	1933			
9	1934			
10	1935			
11	1936			
12	1937			
13	1938			
14	1939		名古屋帝国大学	
15	1940			
16	1941			大連高等商業学校